

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：31201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02512

研究課題名(和文)医療倫理教育のためのG. グリーン作品のナラティブ解析研究

研究課題名(英文) Narrative Analysis of the Selected Works of Graham Greene: Application to First-year Medical Ethics Education

研究代表者

柳谷 千枝子(浅田) (YANAGIYA (ASADA), Chieko)

岩手医科大学・教養教育センター・助教

研究者番号：40714332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ナラティブ・メディスンに基づいた医療倫理教育を实践すべく、その精読教材としてG. グリーン文学を応用し、病者視点の物語に着目して諸作品を分析した。主として作中の医療関連描写、キリスト教倫理観の普遍性とスピリチュアリティに加え、病者の物語や心理描写、作中人物の身体的、精神的、社会的、宗教的問題およびトータルペイン、さらには癒しと回復のプロセスに着目した。これらを医療倫理教育に応用した結果、医療系学生が病者の心情を読み解き個々の問題点を抽出して対応策を探るなど、自己の医療人モラルを形成することにおいて、ある一定の学習効果が得られたことから、彼の作品は医療倫理教育の題材として有効であることを証明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学は、人間の物語がもつ象徴やメタファーが巧みに表現されているその特色から、病に向き合う現場や人々の現実と深く関連することへの気づきを提示する。本研究は、G. グリーンの文学作品を医療的観点から「病者視点の物語」として読み解き、それを医療倫理教育に応用する試みを通して、文学の文理融合的活用の可能性および作家研究の新境地を開拓する。さらに、ナラティブ・メディスンに基づく全人的医療倫理教育モデルを整備し、今後、医療系学生が臨床の現場において要求される多様な価値観の尊重・バランスのとれた判断力・病者の心理の変化や内なる声の受容の仕方を把握する能力の育成に寄与する。

研究成果の概要(英文)： In order to practice medical ethics education based on Narrative Medicine, the selected works of Graham Greene were applied as the textbook of close reading method and were analyzed focusing on “the narrative of the sick people (=patients)” in mental and physical distress. In addition to the medical-related depictions in his works, the analysis included Christian ethics and spirituality, the physical, mental, social and religious issues, and also total pain of the characters. Furthermore, we focused on the healing aspects and recovery process.

As a result of introducing these keywords to medical ethics education, medical students independently took a closer look at what problems the sick people had and cultivated the ability to properly understand the complex stories of the individual. Thus, on these grounds we concluded that his works are not only Catholic literature, but also universal literature of practical use in medical ethics education.

研究分野：英文学

キーワード：グレアム・グリーン文学 ナラティブ・メディスン 医療倫理教育 スピリチュアル・ケア

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

医療人類学、家族心理療法、社会学的理論を中心に、患者の病体験を重視する医療や対人援助の方法が提唱される中で、イギリスでは1988年にNarrative Based Medicine (NBM)というムーブメントがジェネラル・プラクティショナーの間で興った。これが、物語と対話に基づく医療である。一方、アメリカでは、R. シャロンがNarrative Medicine (NM)という医療人教育を提唱し、2000年からコロンビア大学で医学部学生・医療職希望者を対象に**物語精読の方法**を応用した教育プロジェクトを開始している。さらに、ミシガン州立大学の医学部カリキュラムには、医師と患者の関係を学ぶコースに「文学」が取り入れられている。学生は、患者が医師に求めることは何か、病めるということとはどのようなことを意味するか、文化と癒し、医師になるとはどういうことか、医師と患者との効果的あるいは非効果的な交流といった諸問題をめぐる**現代の短編作品**を読み、議論する。その学習効果については、「正しい」解答が何であるかを学生に提示しない帰納的学習形式であるにもかかわらず、およそ9割の学生がコース終了までには患者中心、あるいは関係中心のモデルを表現できるようになり、現在ではアメリカの医学部の約3割が**文学と医療**における何らかの指導を取り入れている。

日本においては、立命館大学の齋藤清二氏らが英米のNBMとNMの方法を日本に紹介したことにより、一部の医療人面接や臨床現場の多職種協働場面では病や病者・医者**の物語**に視点を当てる方法が導入されるようになってきた。ナラティブ・アプローチ（物語精読に基づく双方向的対話）の背景には、自然科学としての医学が科学技術に偏重し、病者や医療スタッフを置き去りにしてしまったことへの反省と、人文科学—とりわけ文学が提示する人間の物語がもつ象徴やメタファーが、病に向き合う現場や人々の現実と深く関連することへの気づきがある。しかし、医療人教育の現場ではナラティブ・アプローチによる教育方法は未開発のままである。岩手医科大学は長年、教養教育を重視したカリキュラムを実践しており、近時、初年次文学系の講義でナラティブ・アプローチによる教育を導入するようになったばかりである。この内容をより良いものに改善・発展させるべく、医療人にとって欠かすことのできない倫理教育をプラスして文理融合的立場で講義の幅を質的量的に広げ、学年を超えて全学的なカリキュラムにおけるナラティブ・アプローチに基づく教育モデルを整備することは、全人的医療倫理教育実践における喫緊の課題となっている。

2. 研究の目的

本研究は、医育におけるナラティブ・アプローチの手法を医療倫理教育に応用し、この手法が病者の理解や病の治癒のプロセスに対して能動的に働きかけるツールとなること、さらに物語精読の技法を通じて多様な価値観の尊重・バランスのとれた判断力・病者の内面的理解に直結することを解明する。そこで精読テキストとして、英国カトリック作家グレーム・グリーン(Graham Greene, 1904-1991)の諸作品を取り上げる。ここには、正解を持ち得ない人間の心の葛藤が剔出され、神・天・自然といった絶対的な存在と弱者としての人間存在を対峙させる表現機構のもと、老・病・死と向き合う人々の生き様が描かれている。本研究ではグリーン**の作品**を医療的観点から読み解くことで、生と死、人間の内なる声の受容の仕方、キリスト教的理念を例にした倫理的問題等を抽出して解析し、これらを活用して医療人育成のための医療倫理教育を実践することを目的とする。そして、彼の文学作品がその内容から、カトリック文学としてのみならず、医療倫理教育においても十分にその力を発揮する普遍的な文学であることを立証する。

3. 研究の方法

医療人育成のためのナラティブ・アプローチによる医療倫理教育の実践に向けて

- (1) 教授者の準備：①グリーンの諸作品の構造分析－医療関連描写、キリスト教的倫理観の普遍性、病者のストーリーや心情表現を分析する。②ナラティブ・メディスン、スピリチュアルケアについて研究する。
- (2) 調査・情報収集・学会参加：【イギリス】Graham Greene Birthplace Trust (GGBT) 参加、資料収集、現地調査【東京】ライフ・プランニング・センター (LPC) 主催 Workshop、その他関連研究会、日本キリスト教文学会など。
- (3) 教育実践：作品内の病者・倫理問題に関する描写の抽出、精読による登場人物の身体的、精神的、社会的、宗教的問題の分析、分類、癒しと病者の回復／治癒のプロセスに着目する。
- (4) 受講者のコンピテンシー：病める人の心情理解、患者の問題点を抽出し解決法や対応策を探る、医療倫理観から自己の医療人モラルを形成する。
- (5) 成果報告：日本キリスト教文学会、白百合女子大学キリスト教文化研究所、日本英文学会（口頭発表、学術誌論文掲載）。

4. 研究成果

(1) 国内外でのグリーンの諸作品および Narrative Medicine 調査

年次大会 Graham Greene Birthplace Trust (GGBT) 主催による International Festival（開催地：イギリス）に参加し、医療倫理教育におけるグリーン文学貢献の可能性について探るべく、オープン・ディスカッションおよび海外の医師へのインタビューを通じて、彼の諸作品やナラティブに関する最新情報と資料収集に加え、本研究の今後の発展につながる課題について精査した。

【イギリスでの調査結果】

[2017] グリーンの作品には、死の概念や安楽死、また作家自身の双極性障害の症状が作品に散見されること等を確認した。さらに、彼の多くの作品には「失意の人間こそが魂の救済のチャンスがある」という一貫した主要テーマがあり、スピリチュアルの問題や失意の人間の心境を巧みに表現していることから、医療倫理教育の題材として有効であることを確認した。

[2018] 文学における矛盾を孕んだ人間心理の複雑さや葛藤を読み解くことは、病に苦しむ患者の心の深奥に寄り添う姿勢を養うことに役立つ点から、こうした作品の技法は医療倫理教育の一助となることを確認した。

[2019] 研究課題と関連するテーマとして、<humanities>の問題に注目した。近年、医療従事者は Medical Humanities について学習することが求められているが、実情、医療教育における「人間性教育」プログラムは発展途上にある。しかし、文学の中でもとりわけ彼の作品には Medical Humanities のコアである <humane feelings> (sympathy, empathy, compassion, pity, concern and caring) が色濃く描出されていることから、学生は文学を読み解くことでこれらの感情や宗教の違いを認識し、臨床現場で様々な価値観の患者の気持ちに寄り添うことが可能になると期待される。このような点から、医療倫理教育における「文学と医療」の重要性を再確認した。

医療倫理教育の実践法について検討・準備を進めるため、日本キリスト教文学会やオープン・ダイアログ講演会等、関連学会、ワークショップに参加し、グリーン作品のナラティブ解析に重要な情報を収集した。

【国内での調査結果】

「開かれた対話（オープン・ダイアログ）」は、精神医療におけるコミュニケーション・アプローチの1つで、本研究課題の主要テーマ「ナラティブ」の延長線上にあると考えられる。フ

インランドの精神医療の事例を通して、患者との対話の目的は、医療スタッフ側が状況をコントロールするためではなく、彼らの苦しみを共有し、共に耐え、共に問題の「答え」を探っていくことにあること（経験の共有）、こうした対話自体が治療につながっていくこと等、本研究を「対話と癒し」の側面から分析するという新たな見識を得ることができたため、今後の研究課題の1つに加えることとした。

また、日本キリスト教文学会では「祈り」のキーワードに注目した。祈りには、言葉による祈り、心で唱える祈り、無意識の祈り、賛美の祈り、感謝の祈り、自分への祈り、他人に対する祈り等、様々な形がある。医療人が患者の回復を「切に願って」治療やケアに携わる場合、その願いもまた「祈り」と共通する強い念であることが確認できた。「文学における障害者の描写」の発表では、障害とは恵みか試練かと問うテーマに触れ、医療倫理教育にとって重要な課題となる情報を得ることができた。

(2) 短・長編作品のナラティブ分析および成果報告

作家の短・長編小説の中でも、とりわけ、医師、歯科医師、病気、症状、薬などのメディカルタームが散見される作品を取捨選択して精読、再考した。具体的には、*The Power and the Glory*、*The Heart of the Matter*、*A Burnt-out Case*、“A Chance for Mr. Lever”、“Dream of a Strange Land”、“The Moment of Truth”を中心に作品構造ならびにナラティブ解析を進め、対話を通してどのような心理的変化・効果が見られるのか「病者視点の物語」に注目した。その中で、*A Burnt-out Case*、*The Power and the Glory* と *Narrative Medicine* との分析結果について、学会発表および学術論文にて報告、最終年度には研究成果報告書「医療倫理教育のための G. グリーンのナラティブ解析研究」を発表した。キーワード：登場人物の病の種類と行動分析、癒しと回復、聖書とスピリチュアル・ケア、トータルペイン（身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、宗教的苦痛）の側面から捉えたナラティブ解析を中心に論証した。

(3) ナラティブ・アプローチによる医療倫理教育の実践

「医療と物語」（医・歯・薬・看護学部1年）、「医療倫理とヒューマニズム」（薬学部4年）「初年次ゼミ」（医学部1年）の科目の中で、本学の医学生を対象に、グリーンの諸作品と *Narrative Medicine* に関する教育を実践した。特に「初年次ゼミ」では、NM を意識しながら *A Burnt-out Case* の原書を読み進め、作中の病者の心情や回復へのアプローチについて学習することを試みた。学習方法：①病の種類について調査する。②作品を精読し、病者の心情や信念について描写されている部分を抽出する。③回復のアプローチや癒しとは何かについて調査、考察する。④病者の問題点を抽出してレジュメを作成し、発表、ディスカッションする。

学生は作品内の病者の状況を分類し、各々が抱える問題を抽出しながら、疾患、病、病気の概念の違いとそれぞれの定義を学習し、それゆえ個人に応じた適切な対応やスピリチュアル・ケアが必要であることを理解した。上記教育実践の結果、病者の心情に寄り添う姿勢を育むための医療倫理教育には、人と人との深い心の交流、言葉の持つ力が病者の理解や病の治療のプロセスに不可欠であることから QOL やスピリチュアリティ、ヘルス・ヒューマニティー等についての知識と分析も必須であることが分かり、今後の新たな研究課題を発見することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Chieko YANAGIYA	4. 巻 21
2. 論文標題 Narrative Studies of “Total Pain” in the Works of G. Greene: A New Approach to Medical Ethics Education	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Shirayuri Christian-Cultural Studies	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Chieko YANAGIYA	4. 巻 20
2. 論文標題 Medical Cases in A Burnt-out Case by G. Greene: Focusing on Sickness and Healing	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Shirayuri Christian-Cultural Studies	6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柳谷千枝子	4. 巻 34
2. 論文標題 グレアム・グリーン文学の効果的活用について考える 医学教育の観点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本キリスト教文学研究	6. 最初と最後の頁 81 90頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳谷千枝子
2. 発表標題 G. グリーンの『燃えつきた人間』における主人公ケリーの病い - 回復に至るプロセス
3. 学会等名 第47回日本キリスト教文学学会全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 柳谷千枝子、平林香織、藤澤美穂、相澤文恵、山本佳代乃	4. 発行年 2020年
2. 出版社 永代印刷株式会社	5. 総ページ数 72ページ
3. 書名 [2017-2019年度報告] 医療倫理教育のためのG. グリーン作品のナラティブ解析研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	平林 香織 (HIRABAYASHI Kaori)		
研究協力者	藤澤 美穂 (FUJISAWA Miho)		
研究協力者	相澤 文恵 (AIZAWA Fumie)		
研究協力者	山本 佳代乃 (YAMAMOTO Kayono)		